



TITLE:

日本の数学関係の周年事業について (数学史の研究)

AUTHOR(S):

真島, 秀行

CITATION:

真島, 秀行. 日本の数学関係の周年事業について (数学史の研究). 数理解析研究所講究録別冊 2021, B85: 183-186

ISSUE DATE:

2021-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/265144>

RIGHT:

© 2021 by the Research Institute for Mathematical Sciences, an International Joint Usage/Research Center located in Kyoto University. All rights reserved.

日本の数学関係の周年事業について
On commemorative events concerning to
the mathematics in Japan

真島秀行 (お茶の水女子大学名誉教授)

MAJIMA, Hideyuki* (Ochanomizu University)

Abstract

In this short note, we treat some commemorative events of mathematicians, societies, books etc. concerning to the mathematics in Japan. As a by-product, we are able to build the following hypothesis: SEKI Takakazu was born in "Kansei 20". We are planning to organize some anniversary events in 2022 and those will be useful to activate the study on the history of Mathematics in Japan.

要旨

数学, 数学教育, 数学史の教育・研究の活性化のために2022年に関孝和314年祭開催等を提唱しているが, その概要を記してある. 副産物としては, 関孝和の誕生年を祝い年に出版があったと考えると寛永20年(1643年2月19日から1644年12月2月7日)になると推測されることに気付いたことである.

§ 1. はじめに

筆者は, 1977年に職業として数学研究を始めたが, その年は明治10年(1877)に東京数学会社(日本数学会の前身)が創立されてから百周年の記念の年であり, 記念講演会, 記念展示会が行なわれるなど日本の数学界にとっては盛大な事業・行事が行なわれた. その実行に当たっては, 恩師木村年房先生が日本数学会理事長として関わり, 『明治の数学訳語会』の資料を作成されるなど, 調査研究もされた. また, 1979年の日本数学史学会二十周年記念行事に参加されてもいる. その記念写真が掲載されている雑誌『数学史研究(通巻第82号)』を恩師の遺品としていただいたのであるが, 筆者は, その後いくつか(関孝和三百年祭, 高木貞治没後五十

Received March 5, 2021. Revised April 6, 2021.

2020 Mathematics Subject Classification(s): 01A27, 01A45

Key Words: History of Japanese Mathematics, Seki Takakazu

*退職しお茶の水女子大学所属ではないが名誉教授の称号を受けており慣例で所属とした.

email: majima.hideyuki@ocha.ac.jp

周年，藤澤利喜太郎生誕百五十年，建部賢弘生誕三百五十年；日本数学史学会創立五十周年，六十周年，日本数学教育学会創立百周年）の周年事業・行事に関わってきた。その理由，動機は，ここにあるような気がする。

2008年の関孝和三百年祭に関わり，東京上野の国立科学博物館で「第7回日本の科学者展」として「数学 日本のパイオニア」[1]を開催したが，数学の現代社会での役割，吉田光由，関孝和，建部賢弘，松永良弼，内田五観，菊池大麓，高木貞治，小平邦彦（敬称略）を紹介した。当時はすぐに気が付かなかつたが，1955年に日本で初めて大きな国際研究集会「代数的整数論に関する国際会議」を開催しているが，これは名誉議長高木貞治の80歳（満年齢での傘寿），その恩師の一人である菊池大麓の生誕百周年，カール・フリードリッヒ・ガウスの没後百周年の年の開催になっていた。

§ 2. 関孝和の過去の周年事業

さて，日本の数学関係の周年事業・行事の始まりは，江戸時代の和算の大家・算聖関孝和の周年事業・行事が始まりであろうと考えられる。

まずは，筆者の調査による履歴書を書いておこう [0] .

	本国常陸	養父十郎右衛門	実父内山七兵衛
式百五拾俵	生国武蔵	関	新助
御役料拾人扶持			辛巳五十七

寛文五乙巳年養父十郎右衛門病死 同年跡式被 仰付 御切米高
 百三拾俵之内百俵被下之 小十人組御番被 仰付
 同七丁未年三人扶持被下之
 同十庚戌年 御足米拾俵被下之
 延宝八庚申年 小十人組与頭被 仰付 御加増九拾俵被下之 三人扶持者上ル
 元禄五壬申年 御賄頭被 仰付
 同十四辛巳年 御勘定頭ニ差添可相勤旨被 仰付 御加増五拾俵
 御役料拾人扶持被下之

養父十郎右衛門儀 慶安四辛卯年御帳面ニ而被為附之
 病死之節者 小十人組御番相勤申候

関孝和先生の誕生年は不明であるが本国武蔵という記述と実父内山七兵衛永明が江戸に出た時期，家族構成から1640～1645であろうと推測している。上の履歴書に「辛巳五十七」とあることから，辛巳の年（元禄14年）に数えで57歳であったということから，その56年前の正保2年（大体1645年）に生まれたことになるが，実父の没年と弟が2人（ないし1人）いることからそうではないと考えられ誕生年は依然として不明とされてきた。

一方，宝永5年10月24日（1708年12月 5日）没であることは墓石，寛政重修諸家譜などから確定している。

「大成算経」の成立は建部賢明が「建部氏伝記」（正徳5年（1715））に書いているところでは宝永の末、すなわち宝永8年（4月25日に正徳に改元）（1711）なので三回忌の祥月命日から半年以内に終了しており三回忌記念の位置付けであろう。

門弟であった荒木村英と大高由昌が関わった『括要算法』（宝永6年冬の序文、正徳2年正月の跋文）の刊行は一周忌直後に序文が書かれているが五回忌前となる。三回忌記念事業と位置付けられたのかもしれないが、完成が遅れたと解釈するのではなく、誕生年を知っていたので数えて70歳の古希の記念年に刊行したと解釈したらどうだろうか。誕生年は（慣例表記）寛永20年（1643年）になる。より正確に書けば、寛永20年1月1日は1643年2月19日に相当し、寛永20年12月30日は1644年2月7日で、寛永20年生まれということは、西暦では1643年か1644年生まれということになる。

「綴術算経」の序文は享保7年正月7日（1722年2月22日）で、15回忌記念となりうるものと見られるかもしれないが普通は15回忌法要はしない。もし関孝和の誕生日の方から考えた周年記念とすれば、傘寿記念くらい、喜寿記念や米寿記念ではないだろう。傘寿記念であるとするれば、79年前が関孝和の誕生年となるから、やはり寛永20年（1643年）生まれ、と逆に誕生年が推定できることになる。喜寿記念なら1646年生まれ、米寿記念だとすると1635年生まれとなるが、内山の実父の没年や江戸詰の時期から、それはないだろう。

荒木村英と建部賢弘という関孝和の直弟子の正月に書かれた文書からの関孝和誕生年の推測は今回初めて気が付いたのであるが信憑性は高いのではないだろうか。

関先生の墓の存在が忘れ去られ、建部賢弘没後50年の寛政元年（1789）に藤田貞資著『精要算法』が刊行され、関先生のことが思い出されたのか、寛政6年に本多（田）利明ら浄輪寺の墓を再発見し、10月15日（陰暦望日）の文を刻み墓碑を建立している。彼らは没年月を意識していたであろうが没後76年目（77回忌）になる。彼らは藤田貞資の書物からの間接情報しかなかったであろうから、関先生の誕生年を知らなかっただろうが、誕生年からおおよそ150年後のことであった。

文化4年（1807）の百回忌法要を藤田嘉言が営み墓の修復も行なった、また、名古屋の真福寺にも記念碑が建てられたそうである。百五十回忌にあたる安政4年に金沢において、加賀藩士によるものと町家の人によるものと2基の碑が立てられた [2]。

明治40年（1907）12月5日の二百回忌に向けては、『七部書』刊行、講談会、講談会の記録書籍、追慕供養、贈位奉告会、墓石にそれを刻むことなどが行なわれた。

昭和33年（1958）10月には250年祭として講演会が行なわれ、それを機会に「算友会」（日本数学史学会の前身）が生まれた。

三百回忌、三百年祭については既に述べた通りである。

§ 3. 2022年、関孝和314年祭等

算聖関新助孝和先生が宝永5年10月24日（1708年12月5日）に没してから314（円周率3.14…の近似値の100倍）年目（315年忌）となるのが2022年12月5日である。2022年はいろいろな記念の年でもある。3年前の2019年第15回全国和算研究大会の打ち合わせ会で、上記の趣旨で2022年第18回全国和算研究大会開催の世話人を引き受けている。

あるか簡略に記そう。

- ・毛利重能著、『割算書』(元和8年(1622)) 発刊後400年
- ・吉田光由350年忌. 吉田光由の没年が寛文12年(1672)と出ているものが多いが, 没年月日は寛文12年11月21日で, 寛文12年の11月, 12月は大の月で間に閏月なし, 寛文13年(9月21日に延宝に改元)1月1日は1673年2月17日であるから40日前の1673年1月8日が西暦での没年月日となる.
- ・建部賢弘著,「綴術算経」「不休綴術」(享保7年(1722)序)から300年
- ・山路主住250年忌, 山路主住の没年を安永元年(1772)とするものがあるが, 没年月日は安永元年12月11日で, 安永元年の12月は大の月, 閏月なし, 安永2年1月1日は1773年1月23日であるから20日前の1773年1月3日が西暦での没年月日となる. 没後250年ではないが, 250年忌になる.
- ・内田五観, 算学塾を開きマテマテカ塾と称した文政5年(1822)から200年([2]では総統就任後何年かしてからとあるが[3]ではこの年としている.)
- ・学制頒布, 明治5年(1872)から150年
(太陰太陽暦から太陽暦への改暦から150年でもある.)
- ・高木貞治の類体論に関する第2論文発表の1922年から100年
- ・毛利重能顕彰碑建立(昭和47年, 1972)から50年
- ・小平邦彦が平成9年(1997)に没してから25年

2022年4月からは, 高等学校学習指導要領も新しいものが適用され, 数学, 数学史, 数学教育, 数学教育史の記念の年となる.

なお, その5年後の2027年は次のことがある.

- ・『塵劫記』が寛永4年(1627)発刊から400年
- ・東京数学会社(日本数学会の前身)が明治10年(1877)創立されてから150年

謝辞

査読者及び編集者から年号に関して有益な指摘を受け直すことが出来たので, ここに記して感謝する.

参考文献

- [0] 真島秀行, 「甲府日記」と「甲府御館記」にみえる関新助孝和, 数理解析研究所講究録, 1677, 京都大学, 2010, 47-58
- [1] 関孝和三百年祭実行委員会, 第7回日本の科学者展シリーズ「数学 日本のパイオニアたち」図録, 国立科学博物館, 2008
- [2] 日本学士院編(藤原松三郎著), 『明治前日本数学史』(全5巻), 岩波書店, 2008
- [3] 佐藤健一・大竹茂雄・小寺裕・牧野正博, 『和算史年表』[増補版], 東洋書店, 2006